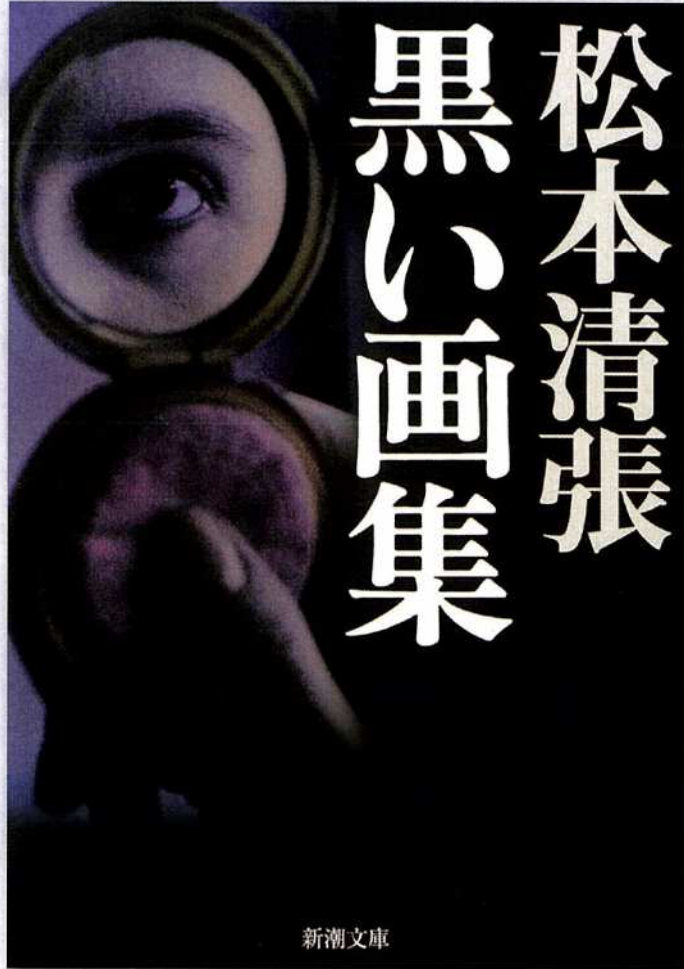


「期待性の堆積は、偶然ではなく、



もう、明瞭な作為ですよ」

「遭難」収録

黒い画集

昭和46（1971）年 新潮文庫

目次

松本清張研究会・第47回研究発表会……………	2
特別企画展	
「松本清張と井上靖―新進作家と目標の星」	6
友の会活動報告……………	7
出前講演報告、奨励事業について……………	8

作品紹介

A 銀行丸の内支店の三人の同僚、岩瀬秀雄（28歳）、浦橋吾一（25歳）、支店長代理江田昌利（32歳）が北アルプス鹿島槍ヶ岳で遭難し、岩瀬が凍死する。

岩瀬真佐子は弟の死に疑惑を抱いた。経験の少ない浦橋が無事下山し、体力も登山歴もある岩瀬秀雄の死に納得がいかなかったのである。真佐子は江田に、従兄の横田二郎を遭難現場に案内してほしいと頼んだ。浦橋吾一の手記によれば、縦走の日は悪天候に見舞われ、キレット小屋を間近にして江田の説得で引き返すが、途中でケモノ道に迷い込んでしまう。夜になり激しい風の中、江田が救援をもとめに去ると、岩瀬は錯乱して闇の中に消えた。登山のベテラン横田は浦橋の手記どおりに再現しながら、遭難時、江田は悪天候になることを予報で了解していたであろうこと、遭難地付近の地図を持参しなかったこと、登山前から岩瀬が疲れるように陥ったことなど、岩瀬の死は仕組まれた「可能性の積み重ねりによる殺人だ」と江田に詰めよった。

清張は、多くの登山家から「登山家に悪人はいない」と聞いたが、作為的な遭難もあるのではないかと考え、「遭難」を書いた。

同時期の山岳小説としては、井上靖の「氷壁」がある。

松本清張研究会・第47回研究発表会

令和6年6月1日(土)

会場 東京学芸大学

講演

「清張作品の「謎」と「秘密」に迫る
—「松本清張はよみがえる」を手引きに—

講師

明治大学准教授

酒井 信

メディアや読者との関わりを含めた清張作品



私は、松本清張を単なる小説家ではなく、「日本の黒い霧」や「昭和史発掘」などその時代の制約の中でタブーを恐れずに様々な問題に切り込み、ジャーナリスティックに論じた作家だと考えております。

また私は、文芸とはメディア、あるいは読者との関わりのある総体をもって作品が成立するものだと考えていますので、清張作品も映画やドラマなどとの関わりも含めてとらえています。例えば「一年半待て」を例にとりますと、これは異なるキャストでずっとドラマ化されています。テレビドラマの尺に合い、逆転劇も織り込みやすい。パブル崩壊後の2002年には浅野ゆう子が出て良い演技をしています。このように清張作品をメディア史として振り返ると、戦後あるいは高度経済成長期という時代が見えてくるわけです。

よく松本清張は動機を描いた社会派の作家だと言われます。しかし、私が興味あるのは作品の中の登場人物たち

の動機よりも、清張がその作品を書いた「動機」です。例えば「西郷札」を書いたときの清張の動機について述べますと、清張は朝日新聞社に勤めながら「週刊朝日」の懸賞に応募するわけですが、「西郷札」の賞金が高いわけです。三等で10万円、国家公務員の初任給で現在の価値に換算すると約393万円です。戦後の清張さんの生活は苦しくて、筆の仲買をされたりしていました。だからよく生活費が欲しくて応募したんだと言われますが、それは本当だと思いません。「松本清張はよみがえる」ではそういう作家の「生のエピソード」に迫ることを目指しました。

今清張文学の研究は昭和史を中心として比較的固い方に行っているのですが、私はもう1度物語の方に戻してみたいと考えています。清張の代表作50冊を読んでいくとやっぱり物語として面白い。本当にサービス精神が旺盛な作家なんです。

例えば鉄道旅行ブームの先駆けとなった「点と線」だと、東京発福岡行きの特急あさかぜが登場します。私は長崎出身ですが、学生時代はまだブルートレインがありました。長崎行きはあさかぜではなく、さくらでした。私は「点と線」を読んで九州は遠いという感覚を持ちました。九州は遠いという感情を描いた映画として、野村芳太郎と橋本忍が最初に手がけた「張込み」があります。冒頭に東京から佐賀までの列車内の描写がある。汗をびっしょりかいて扇風機で風を浴びながら、佐賀になかなか着かない。九州の遠さを描いている作家という点でも、長崎市出身の僕には貴重な作品です。九州北部、あるいは西日本を舞台にした作品も多く、それが清張作品の味わいになっています。

能登半島を舞台にした「ゼロの焦点」も東京からの距離が感じられます。ちょうど能登半島の地震が起きる3ヶ月前に、私は「ゼロの焦点」の舞台にあるやせの断崖に行きました。能登金剛に行くのと清張さんの石碑があります。「ゼロの焦点」は能登半島の風土が生きた作品だと思います。

清張作品は小説だけで完結するのではなくて、映像と一緒に完結する場合があります。その代表的なものが「砂の器」だ

と思います。中国ではこの映画を1億4000万人が観たそうです。中国の改革開放の直後に公表された数本の日本映画のうちの1つだったので、観客数が1億4000万人。「千と千尋の神隠し」が日本の興行収入で一位と言っても数千万人ですよ。清張さんの「砂の器」は、中国で好きな外国映画のランキングで未だに上位に入っています。影響力が東アジアの周辺地域も含めて本当にすごい。

また「日本の黒い霧」や「昭和史発掘」のようなノンフィクションには、生の題材を扱う「ジャーナリズム」としての価値があります。

邪馬台国九州説をめぐる小説もあり、「陸行水行」から始まるわけですけど、これらの作品もよくできています。神功皇后にゆかりがある和布刈神社は「時間の習俗」に出てきますし、香椎宮は「点と線」にも出てきます。古代史に関係する九州北部を舞台にした清張作品も重要で、地域の作家としての魅力になっています。卑弥呼の印鑑ではありませんが、せんが金印も出ていますし、北部九州が古代史の重要な拠点であることは間違いないでしょう。清張さんは宇佐市に八幡宮の総本山があることにも注目していました。邪馬台国九州説を支持していましたが、璧の出土にこだわっていました。王権を表す璧が北部九州で出土していますが、近畿地方では出ていないのです。だから九州説を唱えたわけです。でも吉野ヶ里だとは言っていません。吉野ヶ里は自分のイメージとは違うという言い方を清張さんはされています。

60歳を越えて「昭和史発掘」を終えたら、清張さんは十二指腸穿孔になって入院されています。本当に大変な思いをした後に、60歳を超えて、古代史に突入していく、松本清張という作家のバイタリティーはすごいと思います。

松本清張作品の特徴

松本清張さんは、最初の41年が小倉で印刷画工などを務

めた作家以前の時期で、残りの41年が東京での作家の生活でした。その間に1000に及ぶ作品を手がけました。

「点と線」は雑誌「旅」に連載しましたが、単行本になるまで評判になりませんでした。「点と線」以前は時代小説、歴史小説が一番多い。その次に純文学が多くて、推理小説は「張込み」「顔」からです。そう考えると、初期は歴史、時代小説や純文学の作家として、その後、推理小説家や「日本の黒い霧」などのノンフィクション作家として、人気を博します。そして「昭和史発掘」で近代史の闇に切り込み、70年代は古代史に切り込んでいく。作家として本当に時代ごとに幾つも顔がある作家だと思えます。

また清張作品の魅力は、多様な女性の内面に迫る筆致にもあると思います。「婦人公論」など女性誌の連載も多く、女性の描写がうまいですね。例えば、「波の塔」のラストシーンでヒロインが富士の樹海に入っていきます。このため樹海で自殺ブームが起きるわけです。年間で自殺した死体が数百体も増えたそうです。このため自治体の消防署の経費が跳ね上がった。「波の塔」の本を枕しながらウェアディングドレスを着て亡くなっていった女性もいたとか。

それくらい社会的な影響力があった。みうらじゅんさんが言うマイナス観光地化の力が強いわけです。「ゼロの焦点」のやせの断崖といい、清張作品に登場する場所というのは強烈な負のインパクトを残す。

映画化された作品が36本、ドラマの放送回数は1000回を軽く超えている。ここまで映像化された小説を残した作家は他にいないと思います。それぞれの映像作品が時代を経ても変化しない人間の欲望や感情を巧みにとらえています。これは男女を問いませんね。どちらの性の登場人物も魅力的です。

そして、時代を代表する女優、女優たちが、清張さんの作品から育ったことも大事だと思うんですね。若下志麻、松坂慶子、名取裕子、米倉涼子などが育っています。

松本清張の影響力

松本清張の影響力というのは、映像化作品も含めての影響力だと私は考えています。

代表的なものを挙げますと、「波の塔」については先ほど

お話ししました。青木ヶ原の樹海での自殺が流行しています。後にガス・ヴァン・サントという映画監督が青木ヶ原を舞台に自殺の映画を撮っています。それぐらい国際的な影響を残したのが「波の塔」です。映画版は当時としては珍しいカラー作品でした。

「ゼロの焦点」は火曜サスペンス劇場などの崖っぷちのラストシーンの原型を作りました。能登金剛一帯の日本の景色は、本当に清張作品にぴったりな景色ですね。

「砂の器」については先に触れた通りです。あと意外と知られていないのは、「熱い空気」だと思います。「家政婦は見た」シリーズの原型です。原作が清張さんなんです。特に1983年の大映テレビが作ったドラマシリーズが本当にいい。演出もすごく凝っています。私はDVDで買う価値があると思います。



清張さんの映画・ドラマ作品は原作とは変わっています。

しかし原作を変えられているからこそ、多くのドラマが撮られたともいえます。和田さんの証言を見ても、清張さんは映像化に際してほとんど注文をつけなかったそうです。それどころか、和田さんが清張さんに今度撮るドラマの粗筋を説明したら、「いや、俺はその話は聞いたことがある」と言ったららしいです。

聞いたことがあるも何も清張さんの作品です。「ああそうか、好きにやったらいい」という返答だったそうです。忙しかったのでしよう。清張さんの書斎の机の周りには過去の自分の作品は置いていません。常に次、違うこと、新しいことをやると考えていた作家なのです。和田さんの証言とも符合しています。過去に自分が書いた作品に執着しない。

清張作品の「謎」と

「秘密」に迫る長編8作

8位「絢爛たる流離」

「絢爛たる流離」は「婦人公論」に連載された作品ですが、今意外と読まれています。

でも、読みやすいので、私はいつも清張さんの入門作品として挙げています。ダイヤが転々とする話ですが、朝鮮半島にも行きます。清張さんは戦時中の体験をあまり書いていませんが、それを明確に書いた作品の一つです。主人公は衛生兵です。清張さんも衛生兵でしたが、井邑(せいいつ)という朝鮮半島の町に滞在していた頃にはもう、衛生兵というより炊事洗濯とかの雑用をやらされる役割でした。そのときに見た、戦時下の矛盾とか人間関係のしがらみを描いています。男女問わず関心を持ちやすい作品だと思います。ダイヤは硬いので壊れずに転々とするけど、人間は弱く、どんどん死んでいく。ミステリーとしても面白いし、清張さんの戦時中の体験がわかる、いい作品です。

7位「日本の黒い霧」

「日本の黒い霧」はノンフィクションですが、このスタイルを手に入れて

いく段階として、まず「黒地の絵」があります。「黒地の絵」は、朝鮮戦争のころ小倉の城野キャンピングにやって来た黒人兵の部隊が、脱走して暴動を起こすという短編小説です。次に「小説帝銀事件」を書いています。小説のような部分、例えば、キャンノン機関の名前は出さずに帝銀事件の陰謀があったというフィクションばい所と、ノンフィクションが混ざった作品です。

それが「日本の黒い霧」になると、ほぼノンフィクションの筆致になっている。筆記者の福岡さんも「これを「文藝春秋」に書いて大丈夫ですか」と何回も確認したそうです。特に下山事件の描写はすごい。GHQが下山国鉄総裁を殺したみたいなの、とんでもない内容を最初にぶち込んでいます。本当にジャーナリズム史に残る作品だと思います。批判をする歴史学者の人もいますが、これはジャーナリズムであり、未解決事件に迫った作品なんです。1960年という激動の時代に、松本清張は筆一本でアメリカと戦ったんです。これがいかにリスクなことか。「日本の黒い霧」はピュリツァー賞に値する作品だと僕は思っています。

6位「小説日本芸譚」

松本清張の「謎」と「秘密」に迫る作品の一つとして、「小説日本芸譚」という毛色の異なる短篇集があります。これは名立たる芸術家の人生の時の時を通して、芸術家にも政治があることを書いた作品です。快慶に嫉妬する運慶など、創作的に踏み込んで記しています。ただ、清張さんは「芸術新潮」の連載ということもあって、当該分野の専門家にとにかく電話取材しています。これも松本清張という作家の一つの特徴です。

この小説で特に面白いのは、本阿弥光悦について書いているところです。光悦はいろんな芸術に手を出した人です。そこで清張さんはこういうことを言っています。世の中の人々は多芸に秀でるといふことは難しいことだと考える。しかし一芸に秀でた人間が他の芸に秀でるといふことは、世間で思われているほど難しいことではないと。これは清張さん自身に当てはまるわけです。時代小説のような「西郷札」でデビューし、純文学系の作品「小倉日記」伝や「父系の指」「笛壺」を書き、推理小説で大きな成功を収め、ノンフィクションを書くなど、作品の幅を広げて行った松本清張の姿が本阿弥光悦に重なって見えるわけです。千利休に重なって見えるところもあります。「小説日本芸譚」は松本清張の「実存」を感じられる作品だと思います。

5位「ペルセポリスから飛鳥へ」

清張さんの「謎」と「秘密」に迫る作品として、古代史関連だと「火の路」を挙げることもできますが、私はあえて「ペルセポリスから飛鳥へ」を挙げます。どこを評価しているかというと、これはNHKのロケ隊を連れて行った時の旅行記なんです。パールレビ王朝でイラン革命が起きる直前です。ロケ中には大地震も起きています。それでも清張さんはロケを敢行するんですよ。NHKのプロデューサーも、こんなに人が死んでる最中にロケに行く清張さんの姿が本当に怖かったです。この人は「日本の黒い霧」を書いた作家なんだと改めて感じたという証言を残しています。70歳を超えた松本清張が、「日本の黒い霧」を書いた1960年頃の「社会派」の清張に変わるわけ

ですよ。

清張さんの持論はシルクロードにはいろんな道があるんだということ。『火の路』もあり、拝火教ゾロアスター教も奈良に伝わっていたと考えた。明日香の猿石とか謎の多い奇岩について、イラン人が来ていると考える説は現実にあります。飛鳥寺の大仏さんを見ると、奈良の大仏さんとはお顔が違うわけです。シルクロード沿いの大仏様の顔をしてるわけです。イランのペルセポリスへの旅で、清張さんは明日香の奇岩に似た遺物があることを発見する。この作品は旅行記の代表作だと私は思っています。

4位「Dの複合」

長編で4番目に重要な作品は何かと考えると、私は従来の評価とは異って「Dの複合」を挙げます。これは清張ミステリーの総決算のような作品だと思います。

「Dの複合」の冒頭で、「点と線」を書いてた頃の清張さん自身をモデルにしたような作家が出てくる。「売れっ子」になる前の生活を想起させる描写があります。清張さんに似た作家が登場して、奥さんに何かもつと編集者にいいものを出せ、仕事がなくなったら困るじゃないかみたいなことを言います。「Dの複合」は「点と線」に似た作品だと思います。

京丹後市の木津温泉とか天橋立が出てきて、「点と線」に繋がる旅行ミステリーの集大成とも言えます。浦島伝説、羽衣伝説を下地にした古代史の教養もおりこまれ、古代史ミステリーのような側面もある。「点と線」の続編として、和布刈神社を舞台に鳥飼刑事が登場する「時間の習俗」がありますが、これが2作目だとするならば、3作目は「Dの複合」になると思っています。「Dの複合」は最後まで犯人が分からない。意外性があるって、60歳になる直前に、満を持して出した「点と線」三部作の最終作だと私は考えています。

3位「無宿人別帳」

「無宿人別帳」はすごい作品です。映画版もあって、渥美清が出てくる。獄門島みたいな佐渡島に、木の籠に閉じ込められて送られる渥美清が登場します。非常に贅沢な映画です。「男は

つらいよ」のルーツのような作品です。作中には、「釣りバカ日誌」の三国連太郎も出てくるんですよ。で、三国と渥美のまさかの競演が起きる。松竹映画を考える上で非常に感慨深い。

山本周五郎の「さぶ」は時代小説の代表作の一つです。石川島が描かれるわけですけど、この手のものを書かせること、山本周五郎は最強に近い。ただ、この「無宿人別帳」は「さぶ」に迫ってるかなと思います。

何がアリテイの基盤になってるかというところ、「半生の記」によると、松本清張さんは戦前特高に尋問にあっています。八幡製鉄所とか東洋陶器、今のOTTOなんかの職工が文学仲間について、小林多喜二が「蟹工船」を載せたプロレタリア文学の雑誌の「戦旗」をその友達が持っていたということ。清張さんも小倉警察署に連行されています。3・15事件（共産党の検挙）があって、翌年4・16事件がありました。その間ぐらいに捕まっています。きつい拷問は受けてないけど、それでもお父さんに本を焼かれて文学から離れることになりました。そのときの経験を時代小説に投影してるわけです。昭和恐慌下での経験も反映されているので、「無宿人別帳」はアリテイがあります。お父さんが米相場場で失敗して苦労したり、小学生のときにそのお父さんの寝起きしてるタコ部屋みたいなところに遊びに行つて、衝撃受けています。このような経験も生きているので、「無宿人別帳」は非常に面白い。

2位「球形の荒野」

松本清張さんはいわゆる戦争小説を、ほとんど書いていません。『黒欄たる流離』に朝鮮半島時代のもが出てくる。あとは『黒の図説』の「遠い接近」ですね。これは兵隊時代に虐められた上官に復讐する話です。「昭和史発掘」を書いたときの『週刊文春』デスクの半藤一利さんが、清張作品のベストに選んでいるのは「球形の荒野」で、私も高く評価しています。

映画版もあって、ラストが泣けます。娘がいる父親にとつてはもう泣くしかない映画です。これは多分、清張さんが朝鮮半島で従軍していたときの子供への思い、特に可愛がっていた長女に対する思いが展開された作品だと思います。下地になっているのは、スイスに駐在していた海軍武官・藤

村義朗中佐が、後のCIA長官になるダレスと、終戦を模索した工作です。「何とか、日本全体を、早く平和に戻さなければならぬ。ほくが、こうしてベッドに眼を瞑っている間にも、その一瞬一瞬に、何百人、何千人の生命が失われているのだ」と思うと、空恐しい気がする」という主人公の言葉があります。しかし主人公は工作に失敗して死んだことにされてしまふ。その人物が、戦後日本に「亡霊」として帰ってくるという話なんです。ミステリーとしても上手いですし、舞台が奈良と京都で、風景描写も非常にいい。

清張さんは兵隊として二等兵、一等兵、上等兵という位の低い立場でした。戦争について当事者でもありました。だから、2、26事件以後の戦局について編集者にもほとんど語っていないわけですね。そういう戦争に対する思い、従軍中の娘さんへの思いを遠まわしに描いた作品が、「球形の荒野」だと思います。

1位「半生の記」

長編の一位は「半生の記」です。清張さんを知るのにぜひ読むべき作品です。

もちろんこの作品には、セルフプロデュースという側面もあります。誇張して書いている部分もある。生家が豊かだった時代もあるわけですね。藤井康栄さんが書いているみたいに、生まれたばかりの頃の写真が3枚もあるわけですね。ちゃんと何月何日にいつどこで撮影したと書いている。一人っ子だったのでそれぐらい大事にされた。あと尋常高等小学校卒というのも、当時中学以上に行く男子というのは2割にも満たないわけですね。だから、この世代として高等小学校卒というのは普通だったわけですね。

ただ、「半生の記」は誇張があるにしても、やっぱり胸を打ちます。下関に住んだ時の家が半分、海に出ていたとか杭の上に乗っていたとか細かい描写もリアルですね。全集の「半生の記」の巻の解説は鶴見俊輔です。「ハノイの記」と一緒に入っているんで、ベ平連をやっていた鶴見さんにベトナムに関する事を書いて欲しいと思って、たぶん解説を依頼したと思うんです。ただ、鶴見さんは「半生の記」に打ちのめされて、これは清張作品で一番すごい作品だと書いていて、ベトナムの話にはほとんどふれていないのです。

清張さんは、貧しい時期も確かにあった。でも、一人っ子

でそれなりに都市生活を謳歌できた時期もあった。小倉が街中だったことも大きかった。友達に栗饅頭で有名な胡月堂の息子がいたり、少年時代にそんなに貧しさを感じない。市立図書館も整備されて、本を借りることもできた。農村で経験する貧しさとは違うわけですね。お父さんの商売もうまくいっていた時期もあるんです。だけど、「半生の記」を読むと、鶴見俊輔が感動するぐらいの「貧しさ」が、上手く描けていると思います。

清張作品には私小説的なものは、「父系の指」や「骨壺の風景」などがあるけど、「半生の記」が一番いいです。「文芸」に連載された「回想的自叙伝」の原稿をかなり改稿してるわけですけど、私は「文芸」の原稿より、今文庫で読める「半生の記」の方がいいと思います。冗長な文学論がカットされていて、読みやすく松本清張の人生がよくわかるいい作品です。藤井康栄さんは「松本清張の残像」で新しく調べられた情報などを入れて詳しく解説されています。「半生の記」はいろいろ注釈を頭に入れて読むと、非常に楽しめる本かなと思います。

研究発表

「松本清張における 服装の変容と無意識の構造」

名古屋大学大学院人文科学研究科
哲学専攻博士研究員

川里卓



本研究の目的は、松本清張における登場人物の服装の変容、そこから特徴づけられる日常生活と犯罪世界の対比を、イタリアの歴史家カルロ・ギンズブルグ(1939-)とフランスの

精神分析学者ジャック・ラカン(1901-1981)の概念を用いて分析し、松本清張作品におけるテキストの無意識

の構造を明らかにすることである。

松本清張作品における主人公は、通常の社会生活を送りながら、その精神の根底に同時に犯罪への欲動を隠し持っている場合が多い。松本清張の主人公たちは、日常生活と犯罪という二つの世界を行き来しながら、最終的に殺人など破滅的な結果に導かれる。時には人格の変容さえ伴う。これら二つの世界を横断する場合には、主人公の服装の変化が同時に生じる場合が多くみられる。地味で味気ない服装とともに日常生活を送る主人公が、犯罪世界に足を踏み込む場合、服装が平凡で地味なそれから原色を基調とした派手な装いへと変容するのである。

ここでは差し当たり犯罪世界を(殺人の衝撃やおぞまさが原色の服装として現れ出てくるテキスト世界)とし、「ゼロの焦点」をはじめとして、「黒い福音」や「けものみち」など松本清張の多くの著作において、服装の変容に伴うテキスト世界の移動という特徴を読み取ることが出来る。さらに言えば、松本清張は、服装を基盤にテキストの構造を考えていたのではないかと思えるほど、決定的な場面では原色を基調とした服装の描写を取り入れている。

上記の点を踏まえて、原色の服装という「徴候」を基盤に松本清張作品に一貫する無意識の構造を読み取れるのか、という問題提起を行い、本研究での考察を通して解答を与えてゆく。

第一章では、ギンズブルグの論文「徴候—推論的範例(パラダイム)の根源」を検討し、本稿における松本清張読解の鍵となる「徴候的読解」という特徴を示す。

第二章では、上記の手法から松本清張の「ゼロの焦点」を検討する。

第三章では、ラカンの「失われた手紙」に関するセミナーを分析し、松本清張作品におけるテキストの無意識の構造を取り出すための補助的議論とする。

第四章では松本清張の「けものみち」、第五章で「黒い福音」を検討し、これらの考察を通して、服装の変容を基盤とした松本清張作品におけるテキストの無意識の構造を明らかにする。

*今回の研究発表は、第25回松本清張研究奨励事業の「報告書」にそって行われました。上記内容は、その「報告書」の本研究の目的、研究方法、構成部分の抜粋です。以下の詳しい発表(研究内容は字数に限りがあるため省略します。記念館ホームページの「研究奨励事業報告書」に掲載されている当該「報告書」でお読みください。

特別企画展

井上靖 松本清張と

II 新進作家と目標の星

新進作家の松本清張はある「あとがき」(『松本清張短編全集2 青のある断層』)で、「実際、私は井上靖の出現がなかったら、何を目標にして作品を書いていいかわからなかった。井上氏によって私の行く道は決定した」と述懐している。清張は「井上氏の『面白小説』」を指標とし、「闘牛」「通夜の客」「漆胡樽(じっこそん)」「情誼」のような小説を書きたい目標にしたのであった。



「松本清張短編全集2 青のある断層」
1963(昭和38)年12月 光文社

新進作家と 目標の星

【会場】
松本清張記念館
企画展示室

【会期】令和6年
10月5日(土)
→12月1日(日)

【入場料】
常設展示観覧料を含む

I 松本清張と井上靖

松本清張と井上靖には意外なほど共通点と接点がある。

1907(明治40)年生まれの井上と1909(明治42)年生まれの清張は、学歴の違いはあるが、共に新聞社に勤務している。井上は大阪毎日新聞社で学芸(美術)記者をし、清張は朝日新聞九州支社で広告版を描いた。共に遅い出発の芥川賞作家でもあった。このした共通性は、清張に井上靖への親近感を覚えさせた。



井上靖 昭和28年頃
写真提供:長泉町井上靖文学館

松本清張 昭和32年1月頃
写真提供:西日本新聞社

交流年表

1953(昭和28)年
5月

井上靖が文藝春秋新社主催の講演会で小倉に來たとき、清張は宿を訪ね、一時間ばかり話をした。井上が書きかけの原稿を見せてくれた。清張は「ひどく親愛の情を受けた」と思った。当時のことを清張は、文学的修行をやっているのでも「すすむべき方向」がなかったと書いている。その存在が、私に自分の方向を発見させ、勇氣づけた。そういう意味で、清張は井上靖のことを「尊敬する作家」と書いている。
(「井上さんと私」)

1954(昭和29)年

清張は「大井のお宅にも何度もお邪魔をした」。清張は「いつも、夫人やお嬢さんと呼ばれて、家庭的雰囲気にも浸ることができた。そのためもあり、「井上さんに接すると(中略)、もの分りのいい兄貴に会ったような気がした」。
(「井上さんと私」)

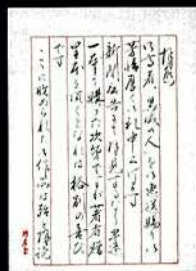
1957(昭和32)年頃

清張はある雑誌の原稿執筆のため国際文化会館に籠っていた。筆が行き詰って意気消沈し「投げてしまいたいような虚脱感」に陥ったとき、清張は「どうしても井上さんに会って勇氣を与えてもらいたい」と考えた。井上は大繁忙の最中に「一時間くらい私とつき合ってくれた」。
(「井上さんと私」)

III 初公開 清張の井上靖宛書簡 ——私淑と御祝

松本清張が井上靖に宛てた書簡が県立神奈川近代文学館に8通所蔵されている。内5通は今回初公開である。

1954(昭和29)の書簡には、歴史小説作家として井上靖を模範として慕う「私淑」の思いが述べられている。1957(昭和32)の書簡には、清張が井上家で「御馳走」になり、井上の「御高説」を拝聴するのが「何よりのたのしみ」だと綴っている。



初公開 井上靖宛清張書簡
(昭和29年4月17日消印)
県立神奈川近代文学館所蔵

IV 最後の手紙 ——長らく御無沙汰して

両作家はある時期を境に、それぞれの道を歩き始める。井上靖は1957(昭和32)年に歴史小説「天平の夢」で新境地を開き、同年松本清張は「点と線」「眼の壁」で社会派推理小説ブームを起こした。1964(昭和39)年に井上は日本芸術院会員となり、同年清張は代表作「昭和史発掘」の連載を始めている。

1990(平成2)年、清張は20年ぶりに井上靖に書簡を送った。



「天平の夢」
昭和32年12月、
中央公論社

ご来場記念

松本清張・井上靖の
「名言しおり」
プレゼント

特別企画展
謹製

2人の国民的作家が遺した名言を記した特製しおりを、くじ引きでご来場の方全員にプレゼントいたします。あなたの人生を照らす「名言」を引き当ててください。

*無くなり次第終了いたします。
*しおりのデザインはイメージです。

特別展示



両作家が関心を寄せた
ガンダーラ仏
(松本清張記念館所蔵)

特別
協力

長泉町井上靖文学館
静岡県駿東郡長泉町東野515-149
☎055-986-1771

令和6年9月21日(土)～令和7年3月11日(火)
「井上靖と松本清張 作家の視点」展開催



春の文学散歩

参加者 23名

- 日 時：令和6年5月29日(水)
- 目的地：安心院・国東(大分方面)
- 行 程：松本清張記念館 → 妻垣神社 → 真木大堂 → 昼食(昭和の町) → 富貴寺 → 両子寺 → 小倉駅 → 松本清張記念館

松本清張記念館友の会では、主に春と秋の気候が良い時期を選んで、清張さんゆかりの地や他都市の文学館・記念館の散策や見学などを行う「文学散歩」を実施しています。

「文学散歩」の開催は、コロナ禍の影響で見合わせていたこともあり、令和元年11月以来、約4年半ぶりとなりました。今回は、清張作品「陸行水行」の舞台で清張さん自身が何度も訪れている安心院の「妻垣神社」を始め、「真木大堂」「富貴寺」「両子寺」を訪ねる日帰りツアーを実施しました。



妻垣神社

朝9時に松本清張記念館を出発したバスは、最初の目的地である「妻垣神社」に向かいました。「妻垣神社」では、神社総代長の矢野さんから、安心院の歴史、神社の由緒や清張との関わり、神社の近所に住んでいた藤井家と清張との交流などを詳しく説明いただきました。皆さん矢野さんの話に熱心に耳を傾けている様子でした。神社に残る貴重な資料(清張直筆の手紙など)を拝見させていただき、「松本清張と安心院」と題する冊子も提供いただきました。妻垣神社の皆様、大変ありがとうございました。

神社を出発して、昭和30年代をテーマにした懐かしさが溢れる昭和の町「レストラン 旬菜南蔵」にて昼食の後、718年に開基されたと伝えられる「真木大堂」に向かいました。現地では、ボランティアガイドの方から、平安から中世にかけて花開いた六郷満山(この地に開かれた天台宗寺院全体の総称)文化の栄華を色濃く残す本尊阿弥陀如来坐像、不動明王立像、大威徳明王像など、国の重要文化財に指定されている平安仏(収蔵庫に安置)、真木大堂旧堂などについて詳しく解説いただきました。

「真木大堂」を後にして、約10分で「富貴寺」へ到着。こちらでもボランティアガイドの方にご案内いただきました。「富貴寺」は、平安時代に宇佐神宮、大宮司の氏寺として開かれた由緒ある寺院です。中でも阿弥陀堂(いわゆる富貴寺本堂)は、宇治平等院鳳凰堂、平泉中尊寺金色堂と並ぶ日本三阿弥陀堂のひとつに数えられ、現存する九州最古の木造建築物であり、国宝に指定されています。

また、堂内に安置されている本尊の阿弥陀如来像は、六郷満山寺院を開基したとされる仁開菩薩の手によって造られたと伝えられています。



富貴寺山門

「富貴寺」から最後の目的地「両子寺」へ。山道を揺られ、途中の急坂では運転手さんの「登れるか?」との声に一抹の不安を感じながらも約30分で無事到着しました。

「両子寺」は標高721mの両子山中腹に位置し、山岳修行の根本道場として、特に江戸期には六郷満山の総持院として全山を統括していたお寺です。自然に恵まれ、新緑、紅葉の季節には遠近を問わず、大勢の参拝客で賑わうとのこと。ここでは、自由に散策いただきました。

今回は、主に神社仏閣を巡るツアーということもあり、階段の上り下りで少しお疲れのご様子も見受けられましたが、天候にも恵まれ、久しぶりの「文学散歩」を満喫いただけたのではないかと思います。皆さんご協力ありがとうございました。



真木大堂旧堂

***** 参加者の声 *****

- 安心院から国東半島の寺社のすばらしさ、自然の豊かさを味わいました。どこかに清張の目が光っているような、わくわく感がありました。
- 妻垣神社で清張さんの話が聞いて良かった。
- 神社の方やガイドさんの説明で詳しく理解することができた。「昭和の町」をもっと散策したかった。
- ランチが豪華で、味付け、彩りも素晴らしく、とてもおいしかった。

友の会 会員更新と 新規会員募集のお知らせ

松本清張記念館友の会は、8月1日から翌7月31日までを1年間として、多彩な事業を実施しております。

年会費は3,000円です。皆様のご入会をお待ちしております。



友の会入会のお申込は、

TEL.093-582-2761

松本清張記念館友の会事務局まで

高校生に伝えてほしい! 「松本清張 面白さの本質」



令和6年5月31日(金)、小倉リーセントホテルで開催された福岡県高等学校国語部会北九州・筑豊地区総会において、古賀館長が「松本清張 面白さの本質」と題して講演しました。

国語の先生には毎年お世話になっている読書感想文コンクールですが、生徒さんのなかには、読書感想文なんて……と苦手意識を持っている人も多いのではないのでしょうか?もしかしたら先生も、ウチの生徒に清張作品は難しい、と思っているかもしれません。読書感想文コンクールの課題作は、短編から長編、現代小説、推理小説、時代小説など、幅広いカテゴリーの中からバランスよく選定しています。短くて読みやすい作品から初めてみてはいかががでしょうか?

「感想文の読書なんて苦痛でしょ?」と思っている高校生に、ぜひ伝えて欲しいのです。松本清張は「面白い」ことを。そしてその「面白い」は、知性を刺激し、人生に示唆を与えてくれるということ。

講演会に行ってきました

日付	主催者・会場等
4/10	松本清張記念館(「さくら」朗読会)
4/17	井筒屋バスターナルホール(北九州市「輝け!!おとなフェス」)
4/18	観山荘本館(中央大学学友会北九州支部)
5/31	小倉リーセントホテル(福岡県高等学校国語部会北九州地区部会)
6/11	周望学会(周防学会 生活情報コース)
6/19	ホテルクラウンパレス小倉(小倉法人会女性部会)
6/30	湖月堂(京都女子学園藤陵会北九州支部同窓会)
7/10	若松区藤木小学校(3年生)
7/12	リーガロイヤルホテル小倉(小倉ロータリークラブ)
7/17	浅川市民センター(あさがく)
7/24	松本清張記念館(穴生学舎ストレッチと脳トレコース)

朗読・ミュージック・おしゃべりサロン



毎月1回、古賀館長と地域の音楽家や朗読家など有志があつまり、SEICHOカフェにて開催しています。松本清張の作品に関連づけた楽曲の演奏や歌唱、朗読などを聞きながらのおしゃべりに多くの方が参加されました。

第26回 松本清張研究奨励事業 入選企画決定

入選者

「古代出雲における本源的な神話の抽出と歴史的背景の研究
—松本清張『私説古風土記』の批判的継承と発展—」

森田 喜久男 (淑徳大学人文学部教授)

「松本清張と能楽」

倉持 長子 (国士館大学文学部専任講師)

「再考・陸軍機密費事件 —松本清張『昭和史発掘』の政治的継承」

小山 俊樹 (帝京大学文学部史学科教授)

● 編集後記 ●

8月を迎え、7月に引き続き猛暑日が続いています。記念館主催で毎年、夏に開館記念講演会を実施しております。今年は8月10日に、映画史研究家の春日太一氏をお迎えし、「松本清張に挑んだ脚本家・橋本忍」というテーマでお話いただきました。内容は次回の館報でお届けします。また、今回の館報でもお知らせしておりますが、10月5日から特別企画展「松本清張と井上靖—新進作家と目標の星」を開催します。

どうぞ記念館にご来館いただき、松本清張と井上靖の関わりについて触れてみてください。(Y.K)



編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813 北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093(582)2761 FAX 093(562)2303
<https://www.seicho-mm.jp>
制作 (株)ハーティプレーン



イラスト: 山藤 章二

- ❖ 開館時間 午前9:30~午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- ❖ 休館日 毎週月曜日(休日の場合は翌日)、年末年始(12/29~1/3)、館内整理日
- ❖ 観覧料 一般/600円(480円)、中高生/360円(280円)、小学生/240円(190円) ※ ()は30人以上の団体
- ❖ アクセス JR:小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城-松本清張記念館前車)
車:北九州市都市高速 大手町ランプより5分

